

[資 料]

ハンドボール競技のゲーム分析

——日本体育大学と成均館大学のゲーム中の行動比較——

松井幸嗣¹⁾・北川勇喜²⁾・阿部徳之助³⁾

西山逸成⁴⁾・竹内正雄⁵⁾

(平成 2 年 10 月 31 日受付, 平成 3 年 1 月 10 日受理)

An Analysis of Handball Game

—Behavior Comparison between Teams in N.C.P.E. and
S.K.K. univ. (Korea) During a Game—

Kouji MATSUI, Yuki KITAGAWA, Tokunosuke ABE,
Issei NISIYAMA and Masao TAKEUCHI

The purpose of the present study was to compare the differences of fundamental skill and covered distance that performed by the Hand Ball players during a game between the N.C.P.E. (Japan) team and the S.K.K. univ. (Korea) team.

As the obtained results, it is clear that the measured variables of the N.C.P.E. team indicated lower level than that of the S.K.K. univ. team in success of shoot and offence activities during a game.

In order to improve the systematic team performance in N.C.P.E. team, it is suggested from the obtained results that the improvement of fundamental skills of personal player during the offence play required and than of the combination play which exerted with two or more of team mates.

緒 言

ハンドボール競技は、相対する 2 チームが 1 個のボールを媒介として、得点を争うスポーツ¹⁾である。このことは、パス、ドリブル、シュートなどの個人的技術と、チームメンバーがお互いに協力して攻撃・防御する集団的技術の総合力であるといえることができる。このチーム総合力を国際的視点をもってみると、攻撃の個人的および集団的技術は近年目覚ましいものがみられる。その代表的なチームが韓国ハンドボール界であり、彼らはソウルオリンピックにおいて女子は金メダル、男子は銀メダルを獲得している。

今回我々の研究は、世界のトップレベルにあるナショナルチームの主軸選手を擁する韓国成均館大学男子チーム（以下成均館大学と略す）と、日本体育大学男子チー

ム（以下日体大と略す）の試合を、個人的技術と集団的技術、さらに移動距離数をくわえたゲーム中の行動を比較・検討することが目的である。

方 法

1) 被検者

日体大チームレギュラー選手 6 名（ゴールキーパーを除く）と、成均館大学チームレギュラー選手 6 名（ゴールキーパーを除く）である。

2) 行動分析

被検者らは、ハンドボールコート（40 m×20 m）で、ルールに規定された時間（前半 30 分—休憩 10 分—後半 30 分）のゲームを行ない、それを 4 台のビデオレコーダー（両ゴール後方およびコート両サイド観覧席に設

¹⁾日本体育大学女子短期大学, ²⁾日本体育大学, ³⁾自治医科大学, ⁴⁾防衛大学校, ⁵⁾星薬科大学

置)によって、4方面からゲーム全体を収録、再生して次の項目について分析した。

イ. シュート出現率

(シュート回数/攻撃回数)

ロ. シュート成功率

(得点回数/シュート回数)

ハ. シュートコース

ニ. 攻撃時におけるミス出現率

(ミス回数/攻撃回数)

ホ. セットプレーからのシュート成功率

(得点回数/セットプレーの攻撃回数)

ヘ. ポジション別によるシュート成功率

(得点回数/シュート回数)

ト. ポジション別による得点率

(得点回数/総得点数)

3) 移動距離調査

試合中における全選手のコート内での位置の移動を記録するために、各選手の位置の移動を視覚的に追跡し、コートの大きさが記録された用紙上に軌跡をあらわし、記録した。このとき、1人の選手にあらかじめ練習を重ねた2名の記録者があたり、記録中の目を離れたプレーを音声で補助させた。

結 果

1. ゲーム分析

表1は、攻撃回数に対するシュート回数(シュート出現率)を示したものである。両チームに後半のシュート出現率に差は認められないものの、前半のシュート出現率は成均館大学が日体大よりも、13%高い値を示し、全体としてみた場合でも7%の差になった。

表2は、シュート回数に対する得点回数(シュート成功率)を示したものである。成均館大学はすべての項目において50%以上のシュート成功率を示した。とくに速攻プレーでは、両チームを比較すると38%の差になって表われている。

図1は、シュートコースを示したものである。成均館大学は、ゴールポストの各コーナーとゴールキーパーの頭上、股下を狙って得点しているのに対し、日体大は、

表1 シュート出現率

	全 体	前 半	後 半
日 体 大	47/77 (61%)	21/38 (55%)	26/39 (67%)
成均館大学	52/76 (68%)	26/38 (68%)	26/38 (68%)

表2 シュート成功率

	全 体	前 半	後 半	遅 攻	速 攻	ペナルティ ス ロ ー
日 体 大	16/47 (34%)	4/21 (19%)	12/26 (46%)	9/28 (32%)	4/15 (27%)	3/4 (75%)
成均館大学	31/52 (60%)	13/26 (50%)	18/26 (69%)	12/22 (55%)	15/23 (65%)	4/7 (57%)

日 体 大

成均館大学

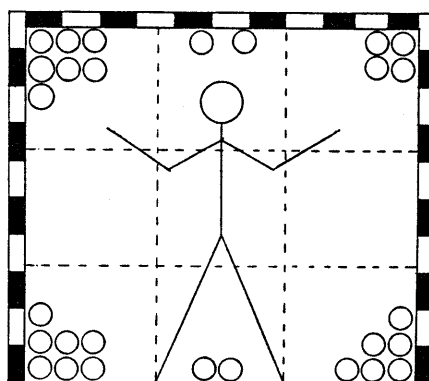
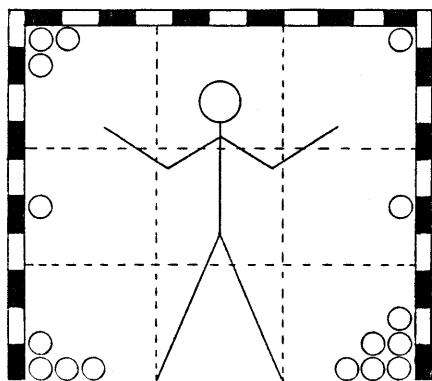


図1 シュートコース

表 3 ミ ス 出 現 率

	全 体	パ ス ミ ス	オ ー バ ー ス テ ッ プ	ラインクロス	チャージング
日 体 大	20/77 (26%)	9/77 (12%)	4/77 (5%)	4/77 (5%)	3/77 (4%)
成均館大学	8/76 (11%)	3/76 (4%)	2/76 (3%)	2/76 (3%)	1/76 (1%)

表 4 セットプレーのシュート成功率

	全 体	1 対 1	2 対 2	3 対 3	その他
日 体 大	6/26 (23%)	1/5 (20%)	3/9 (33%)	2/12 (17%)	12/21 (57%)
成均館大学	13/22 (59%)	3/5 (60%)	6/10 (60%)	4/7 (57%)	18/30 (60%)

特定のコースはあらわれず、ゴール面積全体にばらつきが目立っている。また、ゴールキーパーを前方へ誘い出し、キーパーの頭上を越すループシュートの得点は、成均館大学が3点、日体大は0点であった。

表3は、攻撃回数に対するミス回数（ミス出現率）を示したものである。日体大は、それぞれのミスの種類において成均館大学の値を上回り、全体でも2倍以上のミス出現率を示した。さらにパスミスでは、成均館大学よ

りも3倍のミス出現率を示している。

表4は、集団的技術による攻撃の基礎となる1人の攻撃者と1人の防御者（1対1という）および、2対2、3対3のシュート回数に対する成功回数（シュート成功率）を示したものである。成均館大学は、その他を除くすべての攻撃において50%以上のシュート成功率を示し、さらに、日体大の2倍以上のシュート成功率となっている。

図3は、ポジション別によるシュート回数に対する得点回数（シュート成功率）および総得点数に対する得点回数（得点率）を示したものである。日体大は、A～Hのすべてのポジションで成功率が低く、D、Fのポジションからのシュートは1本も成功していない。これに対し、成均館大学はA～Hのすべてのポジションで得点しており、とくにB・C・Dのポジション（ポストゾーン）

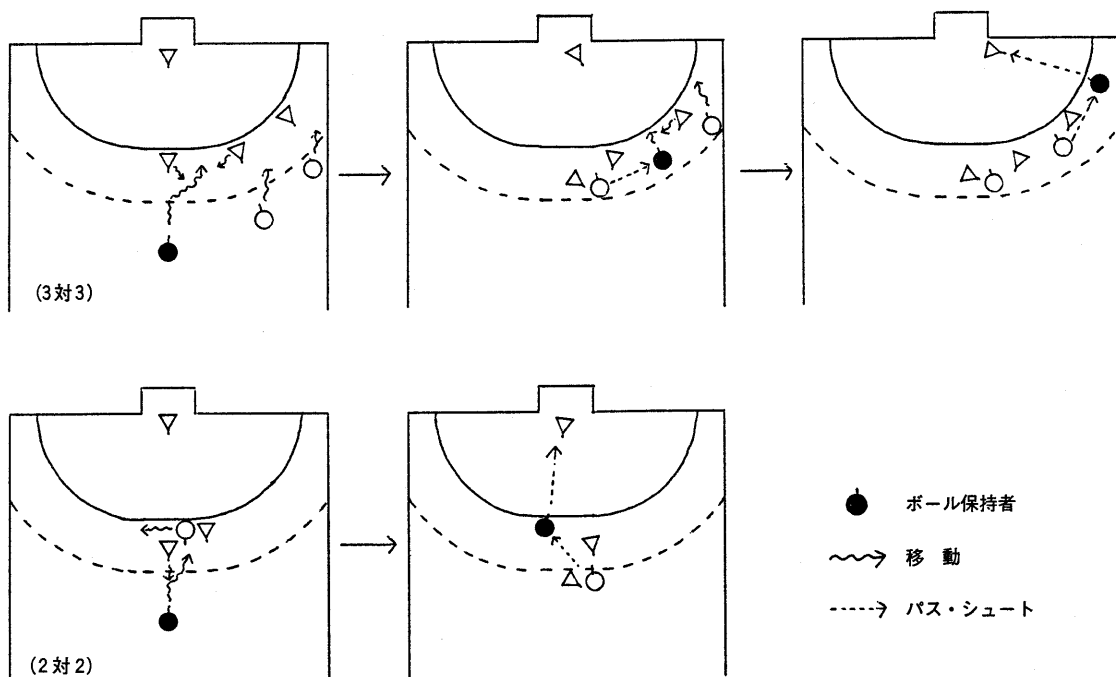


図 2 攻 撃 方 法

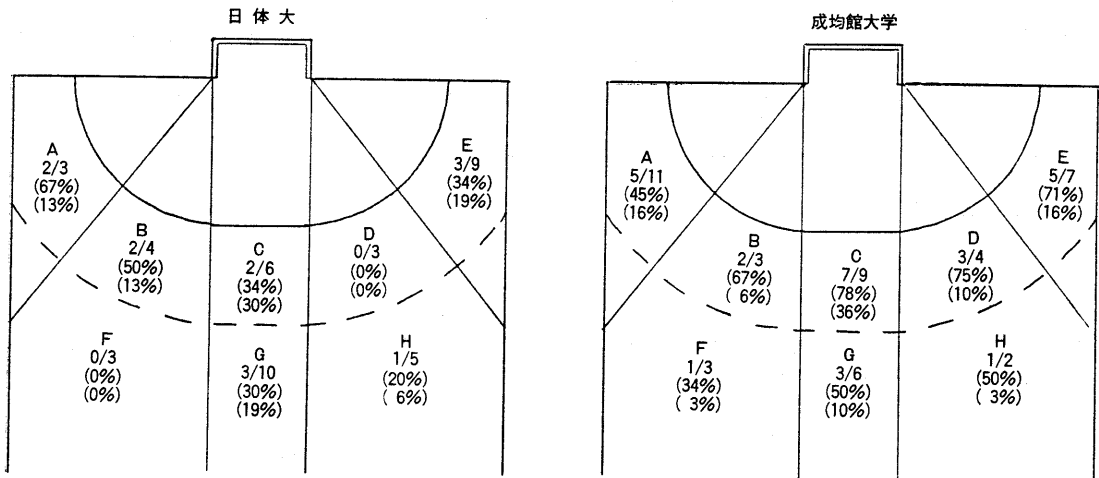


図3 シュート回数と成功率, 得点率

表5 試合中の移動距離

	前 半					後 半					合 計
	歩 行 (m)	中間走 (m)	全力走 (m)	ドリブル走 (m)	小 計 (m)	歩 行 (m)	中間走 (m)	全力走 (m)	ドリブル走 (m)	小 計 (m)	
日 体 大	175	1.089	392	19	1.675	194	992	310	8	1.504	3.179
成均館大学	263	725	449	2	1.439	155	564	299	7	1.025	2.464

からの得点率が高い。

2. 移動距離

表5は、全選手の平均移動距離を、移動のスピードという視点より、歩行・中間走・全力走の三つに分類するとともに、ドリブル走を加えた4項目について示したものである。日体大の中間走の走破距離の差は、前半 364 m、後半 428 m、合計で 792 m を成均館大学よりも多く走っているのが目立つ。ところが、歩行・中間走・全力走・ドリブル走の合計をみると、715 m の差となり、中間走の差よりも小さくなっている。このことは、中間走以外での移動内容が劣ることを示している。特に全力走においては、日体大が 46 m 少なく、後半にわずか 11 m 余分に走っているにすぎない。両チームの走行距離の間には、1%~5% の有意水準で差があることが確かめられた。

考 察

ボールゲームは、同数の選手によって得点が争われ、ハンドボール競技では一定時間内に得点数の多いチームが勝ちとなるゲームである。したがって移動距離を増

し、シュートの機会を多くし、そしてシュートを成功させることがゲームの目的になる。それ故に、個人的技術の中で最も大切な基本は、シュート成功率であるといえる。本調査の結果は、両チームの間に顕著な差となつて表われた。同水準の体力、同水準の技術の場合においても、これまでの試合結果における履歴効果がいずれの上にも重複してくる。成均館大学の選手は、図1に示すようにシュート技術が日体大の選手より、その効果に結びついたプレーをしたことになろう。その結果として、シュート成功率に表われていると考えられる。ちなみにソウルオリンピックでは、金メダルを獲得したソ連のシュート成功率は、平均 64%、銀メダルの韓国は 50%、11位の日本は 47%²⁾であった。これらのシュート技術とともに、勝敗に大きくかわる戦術の中で、シュートにつながるパス³⁾の技術が重要である。日体大のパスミスが、ミス全体の 45% を占めている。近年、ハンドボールの試合はスピード化されており、この中でも速いパスワークの技術が強く要求されるようになった。この点、成均館大学は、速い試合の展開の中でもパスミス、シュートミスが少なく、基礎的な技術がしっかり修得されていると

考えられる。

また、成均館大学は、3対3を3対2、2対2を2対1、1対1を1対0にして、最終的にノーマークにして得点をする集団的技術による攻撃も優れており、この攻撃の中で、とくに注目すべき内容は、図2で示してあるような横への平行のずらしのカットインプレー(3対3)と、1対1をワンフェイントでアウトナンバーにするプレー(2対2)が核になっている点である。

さらに、ポジション別のシュート成功率と得点率では、成均館大学は、ゴールエリア付近と両サイドゾーンからのシュート回数が多く、成功率も高い。この傾向はゴールポストに対して角度が広い展開力と、得点効率がよいゴールポストに近いポジションを有効に活用している攻撃によるものである。チームオフENSEの基礎理論として一般化している幅と厚みのある攻撃戦術論を、実戦で実行している成均館大学の攻撃法といえる。

移動距離では、表6で示したように日体大の方が成均館大学より多く走っているが、ハンドボールの“走”は、ただ単にゴールポストからゴールポストまでの“走”を競うのではなく、強弱をつけたスピードで相手をおかわしたり、相手の弱点⁴⁾をつく瞬間的なダッシュ力は全力走につながり、緩急自在のスピードの変化で、ディフェンスをおかわしてシュートに持ち込む“走”の質の方が、量よりも大切である。

結 論

本研究は、日体大チームと成均館大学チームのゲーム

中の行動を、個人的技術・集団的技術・移動距離から比較した。以下はそのまとめである。

1. 個人的技術面では、シュート力とシュートにつながる正確なパス技術が両チームの間に顕著な差となり、ゲームの勝敗にあらわれた。
2. 集団的技術面では、3対3・2対2・1対1の対峙の関係⁵⁾を打破して、3対2・2対1・1対0からノーマークシュートに結びつける技術の差が認められた。
3. 移動距離では、中間走で日体大、全力走で成均館大学が多く走ったが、ハンドボールの“走”は、瞬間的なダッシュ力、あるいは緩急をつけた“走”が重要であると考えられる。

文 献

- 1) 稲垣安二、他：球技に関する研究、日本体育大学紀要、8号、2-4 (1979)。
- 2) 月刊誌スポーツイベントハンドボール、1988年ソウルオリンピックハンドボール競技男子各国全試合合計データ。
- 3) 阿部徳之助、他：1988年ソウルオリンピックに出場の女子ハンドボールチームのゲーム分析、日本ハンドボール協会機関誌、No. 295、12-16 (1990)。
- 4) 稲垣安二：球技における戦術体系の一考察、日本体育大学紀要、10号、3-8 (1981)。
- 5) 稲垣安二：球技の戦術体系に関する研究、日本体育大学紀要、11号、12 (1982)。